

平成28年度 第3回企画展 (9月3日(土)～10月23日(日))

企画展「常滑の名工「長三 (CHOZA)」

初代伊奈長三 (1744～1822)

初代長三は常滑に古くから続く奥条の甕造りを営む伊奈長兵衛^{ちやうべえ}の三男として生まれました。明和3年(1766)に分家し、甕造りを得意としたことから、甕屋長三郎と呼ばれていました。その後、奥条の総心寺8代目住職^{せいしゆう}の青州和尚に師事し、抹茶器の指導を受けます。紐造りの技術「ヨリコ造り」に加えて、晩年にはロクロの技術もみることができます。作品には郎の一字を省略し、「長三」と記しています。

二代伊奈長三 (1780～1857)

初代長三の偉業を継ぎ、茶器、酒器などにみえるロクロ技術が極めて精巧であったことから、「長三」の名前は江戸や京都にまで聞こえるようになりました。天保14年(1843)に尾張藩12代藩主徳川齊荘^{なりたか}の知多郡巡見の際に、本陣が置かれた正住院^{しょうじゆういん}の庭で、初代赤井陶然^{とうぜん}、初代松下三光^{さんこう}とともにそのロクロ技術を披露し、「陶技の精古今に稀なり」と称賛を受けました。

また、天保年間(1830～1844)に半田板山で白色に焼き締まる白泥土を発見し、海藻を巻き付けた火色焼^{ひいろ}(藻掛^{もが}け)や火襷焼^{ひだすきやき}を創意したと言われています。

三代伊奈長三 (1818～1860)

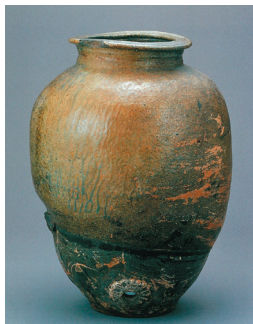
二代には子どもがいなかったため、鯉江方寿翁の本家筋に当たる鯉江佐重^{さじゆう}を養子として招き、三代長三の名を引き継ぎました。製陶の技術は巧みであったといわれていますが、「長三」を名乗った時期はわずかであり、三代長三の作品は現存していません。

四代伊奈長三 (1841～1924)

三代長三の長男として生まれ、ロクロ、手捻りともに巧みでした。火色焼、火襷焼の急須に長けていたこともあり、明治11年(1878)に中国の金士恒^{きんしこう}より支那式茶注^{しなしきちやちゆう}の製法を学ぶなど研究熱心であったといわれています。

五代伊奈長三 (1882～1969)

四代長三の五男として生まれました。四代長三が亡くなり、「長三」の名は長く不在でしたが、昭和26年(1951)、69歳の時に受け継ぎました。五代長三は茶を好み、自作の急須で煎茶を喫することを何より楽しんだといわれています。四代長三の技を踏襲したとみられ、紙のように軽い手捻りの徳利などにその名品があります。



初代長三 焼酎瓶



二代長三 藻掛水指



四代長三 横手急須



五代長三 火襷徳利